

---

デジタルパンク通信 第二十一話

---

Q ラッキョでしょうか。納豆でしょうか？

A 納豆です。

バナナにマヨネーズとケチャップ。これはまだわからないでもない。カレーに納豆とマヨネーズ。ぞっ。こちらアメリカ暮らしでマズイめしには慣れてるが、これは引く。カップヌードルにコーヒー牛乳。うー。見るのもおぞましい。

でもテレビでは、中学生や高校生の女の子たちがオイシイオイシイと喜んで食べている。変食ブームだとか。ガングロ、美白に変身していたお前ら、今度の変食かい。大人たちはそれをみて、グエーっと言って困惑したり、あきれて笑ったりする。食文化の行方に危機感をつのらせ憤ったり、味覚の荒廃を嘆いたりもする。それともなにかい、お前らは、大人がオイシイと思ってきた体系を否定するつもりなのかい。そんな味はダメだ、とボクらを挑発するのかい。ずーっとそうだったかもしれないけど、そんなの飽きた、とでも言うのかい。

料理は不思議。食材が全く同じでも、調理によって味は無数に広がる。同じ信州みそ、同じシジミを使っても、おかあさんが作ったみそ汁とそうでないのでは如実にテイストが違う。食材は無数にあるわけではない。スーパーの売り場は限られていて、なじみの野菜や肉を選ぶ。その組み合わせと手際が無数の味を形づくる。

音楽も似ている。楽器やメロディーを組み合わせ、それを演奏する手際に音をつくる。表現者たちは、絶妙のバランスや見事な手さばきを求めて、朝も夜も格闘している。心地よい無数の音が生まれていく。

気になるのは、そんな音楽がいま満足されているのかということだ。これからも満足していつもらえるのかということだ。若い連中の耳にはヘッドフォンが挿入されていて、いつも音が鳴っている。しかし、果たしてやつらは音楽を聴いているのだろうか。耳には鳴っているけど、リアリティーの深いところに響いてるのだろうか。心地よくパターンが繰り返されているだけなんじゃないだろうか。

いま音楽に必要なのは、よどみをブレイクスルーすることかもしれない。21世紀だ。これまでと全く違うテイストの音があっという間。しかも、ネット時代だ。少数の天才アーティストがシーンを塗り替えるという従来パターンでなく、オーディエンス側から革命が始まるかもしれない。そう、ひょっとすると、お前らのような。カレーには福神漬とラッキョという決まりがあったのに、マヨネーズ納豆ぶっかけて、パターンを打ち破ってしまうような。営々とプロが築きあげてきた味の体系をおじゃんにしてしまうような。味の固定観念をさらりとひっくり返してしまうお前らのような。

そんな世代が、音を変えていかないはずがない。

---